



第91期 株主通信

2021.4.1～2021.9.30

株式会社SUBARU IR部 SR室

株主の皆様には平素よりご高配を賜り厚く御礼申し上げます。

第2四半期業績の概況

自動車の売上台数は、37.5万台(前年同期比1.2万台増)、売上収益は1兆3,417億円(1,233億円増)となりました。

また、営業利益は545億円(238億円増)、親会社の所有者に帰属する四半期利益は448億円(211億円増)となりました。

各実績は前年同期を上回ったものの、世界的な半導体の供給不足や東南アジアでの新型コロナウイルス感染症の拡大により、部品の供給に大幅な制約があり、国内工場・米国工場ともに生産調整や操業の一時停止を行いました。このように厳しい状況が継続したため、当初想定していた以上の影響を受ける結果となりました。

販売現場の状況

生産は厳しい状況であった一方で、SUBARU車に対する各市場での需要は、非常に強いものがあります。特に主要市場の米国では、その傾向が顕著です。

これまで45日分が適正とされていた現地の販売店の在庫は、わずか4日分とかつてない低い水準で推移しており、店頭にある車両はほぼ売約済みです。したがって、販売店に到着する前のいわゆるパイプライン在庫を販売している状況です。また、車両をご注文いただき、納車までお待ちいただいているお客様も非常に多くいらっしゃり、大変申し訳なく思っております。

現地に車両さえ供給できれば、さらに多く販売できたことを大変悔しく感じており、販売店と私どもメーカーが一体となって、かつてない高効率のオペレーションを推進し、1日でも早くお客様に車両をお届けできるよう尽力いたします。また、本年3月に米国市場向けの「アウトバック」シリーズに、新たに導入した車種「ウィルダネス」を中心に高収益な車種の受注割合も増えております。今後、生産が回復した際には、さらなる販売の増加と収益の拡大につながる素地は十分に整っていると感じております。

通期業績見通し

半導体の供給不足と新型コロナウイルス感染症の拡大による生産制約の影響は想定以上に大きく、挽回できる期間も限られるため、今期の通期業績見通しは売上収益2兆9,000億円、営業利益1,500億円に修正させていただきました。

厳しい状況は続いておりますが、各費用の見直しや保証修理費の削減、販売奨励金の抑制などを引き続き推進いたします。また、低在庫下でのオペレーションなどコロナ禍での学びを活かし、より筋肉質な企業体質へ変革させ、全社一丸となって業績見通しの達成に取り組んでまいります。

SUBARU初のグローバルEV「SOLTERRA」

11月11日にワールドプレミアを行いました「SOLTERRA(ソルテラ)」は、トヨタ自動車株式会社(以下、トヨタ)との共同開発のEV(電気自動車)です。「いっしょに いいクルマつくろう!」というスローガンのもと、チーム全員が正直に、妥協せず、納得するまで議論を繰り返し、開発に挑みました。まさにSUBARUとトヨタ両社の強みをそれぞれが惜しむことなく持ち寄り、両社の技術者が切磋琢磨することで、本当にいいクルマ、いいEVが完成しました。本紙裏面に特集しておりますので、是非ご高覧下さい。

株主の皆様におかれましては、引き続き変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

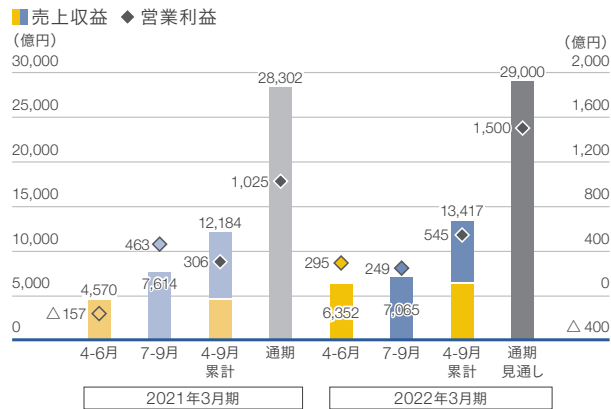
2021年11月

代表取締役社長

中村知美



売上収益・営業利益



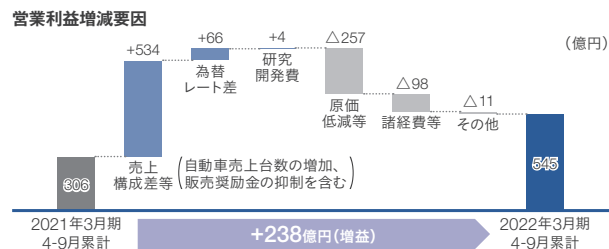
売上収益(4~9月)

7~9月は、世界的な半導体の供給不足に加え、東南アジアでの新型コロナウイルス感染症の拡大により、当社がお取引先から調達している部品の供給に制約がありました。これにより、国内・米国の工場において生産調整を行い、国内では9月に操業を一時停止しました。重点市場の米国を中心にSUBARU車に対する需要は引き続き堅調に推移していますが、これらの影響により生産および売上台数は前年同期比で減少となり、販売店の在庫は非常に低い水準です。

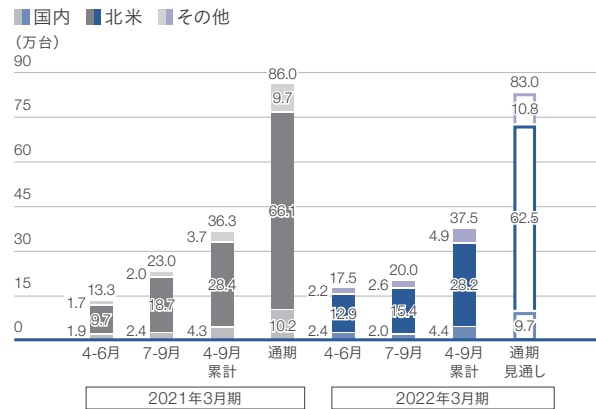
一方で第2四半期連結累計期間(4~9月)の売上収益は、新型コロナウイルス感染症の影響が大きかった前年より自動車売上台数が増加したことなどにより、1兆3,417億円と前年同期比1,233億円(10.1%)の増収となりました。

営業利益(4~9月)

自動車売上台数の増加や販売奨励金の抑制などにより、営業利益は545億円と前年同期比238億円(77.9%)の増益、税引前四半期利益は612億円と前年同期比251億円(69.4%)の増益となりました。また、親会社の所有者に帰属する四半期利益も448億円と前年同期比211億円(88.9%)の増益となりました。



自動車売上台数



自動車売上台数(4~9月)

7~9月は生産台数減少の影響を受け、売上台数も前年同期比で減少したものの、4~6月が前年同期比で大きく増加していたことから、第2四半期連結累計期間(4~9月)における売上台数の合計は37.5万台と前年同期比1.2万台(3.3%)の増加となりました。

なお、海外での売上台数は33.1万台と前年同期比1.0万台(3.2%)の増加、国内での売上台数も4.4万台と前年同期比0.2万台(4.5%)の増加となりました。

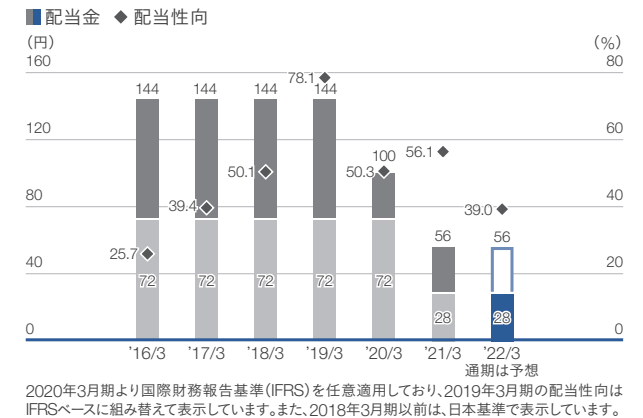
	4-6月	7-9月	4-9月累計
2021年3月期	13.3万台	23.0万台	36.3万台
2022年3月期	17.5万台	20.0万台	37.5万台

自動車生産台数(4~9月)

調達している部品の供給に制約があり、国内・米国の工場において生産調整や操業の一時停止を行ったことなどから、7~9月の生産台数は4~6月より減少しました。第2四半期連結累計期間(4~9月)の生産台数の合計は34.2万台と前年同期比1.2万台(3.4%)の減少となりました。

	4-6月	7-9月	4-9月累計
2021年3月期	9.2万台	26.2万台	35.4万台
2022年3月期	18.4万台	15.8万台	34.2万台

配当金・配当性向



通期業績見通し(4~3月)

調達している部品の供給に制約があることから、操業への影響を考慮し、2021年8月3日に公表した2022年3月期の通期連結業績見通しを下方修正しました。

通期の売上収益は2兆9,000億円と前期比698億円(2.5%)の増収、営業利益は1,500億円と前期比475億円(46.4%)の増益、親会社の所有者に帰属する当期利益は1,100億円と前期比335億円(43.8%)の増益を見通しています。なお、通期の連結業績見通しの前提となる為替レートは110円/USDドル、130円/ユーロです。

また、通期の連結業績見通しは修正しましたが、配当予想については前回公表から変更していません。

配当(4~3月)

当社は株主の皆様の利益を重要な経営課題と位置付けており、継続的かつ安定的な配当を基本としつつ、業績連動の考え方に基づいて、毎期の業績、投資計画、経営環境を勘案しながら、配当額を決定します。複数年の業績やキャッシュなどの見通しも含めて検討し、業績に連動させて毎年配当を上下させるのではなく、一定期間の配当を継続的・安定的に実施したいと考えています。

新型コロナウイルス感染症の影響で配当を下げざるを得ない状況となった際も、同様に単年のみならず、その後の業績回復を含めた、複数年での業績やキャッシュなどを含めて検討した上で、配当額を決定しました。

現時点においても、いまだ不透明な状況が続いていること、また目安としている配当性向(30~50%)を維持していることから、中間配当は1株当たり28円とさせていただきます。また、期末の配当予想は1株当たり28円とし、年間配当は1株当たり56円を予定しています。

乗って、感じて、考えて、物理にする

スバルドライビングアカデミー



設立の経緯

SUBARUには、開発したクルマに乗って評価する専任の「テストドライバー」という職種はなく、開発段階でクルマを評価するのはすべて「エンジニア」です。

クルマに乗ってその良し悪しを評価するだけでなく、乗って感じたことを理論的に思考した上で設計図に落とし込む。この行程を分業せず、同じスタッフが一貫して取り組んでいるところにSUBARUの強みがあります。この強みを強固なものにするために、「乗って」「感じて」「考えて」「物理にする」というエンジニアが持つ能力をさらに磨き、より良いクルマづくりにつなげることを目的に創設されたのがスバルドライビングアカデミーです。

SUBARUの開発:分業せずに一貫してできる人財が強み

「乗って」 「感じて」 「考えて」 「物理にする」

運転スキル 評価能力 論理的思考 計測技術

トレーニング範囲

エンジニアが評価できるレベル以上に良いものをつくることはできません。つまり、評価能力の向上なくしてクルマの性能向上は難しいということです。

そこで、スバルドライビングアカデミーではエンジニアの運転スキルとテストドライブ時の評価能力を高めるプログラムを体系化し、高いレベルの評価能力を持つ人財を育成することに取り組んでいます。

いかなる状況下でもクルマがコントロールできるような高度な技能の習得、そして将来、開発の中核を担うような人財の育成を目的として、おむね毎年、幅広い部署からメンバーを募っています。

カーボンニュートラル燃料を活用したレースへの参戦
～バイオマス由来の合成燃料を使用し、来年のスーパー耐久シリーズに挑戦～

SUBARUとトヨタ自動車株式会社(以下、トヨタ)は、カーボンニュートラルの実現を目指し、2022年年央に世界各地での発売を予定している両社共同開発によるBEV*、SUBARU「SOLTERRA(ソルテラ)」とトヨタ「bZ4X(ビージーフォーエックス)」などで、電動化を含めた対応を進めています。

今回、新たな選択肢を検討するため、2022年シーズンのスーパー耐久シリーズの「ST-Qクラス」に、バイオマスを由来とした合成燃料を使用する新たな車両を投入し、実証実験を行います。具体的には、SUBARUは「SUBARU BRZ」をベースとした車両、トヨタは「GR86」をベースとした車両で参戦します。

両社が協調するとともに、レースの場では競い合うことで、あらゆる選択肢について技術開発のスピードを上げ、カーボンニュートラルの実現に向けて挑戦していきます。

* : Battery Electric Vehicle(電気自動車)

活動内容

運転スキルを磨くトレーニング、運転の心構えを学ぶ座学講習、クルマ全体を知るための車体整備講習などがプログラムには含まれています。運転スキルを磨くトレーニングは、サーキットでレーサーが行うようなものではなく、基礎的で地味な訓練に重きを置いています。性能のわずかな違いを見極めて、クルマを評価していくためには、再現性の高さ、つまり何度でも同じように運転できる能力が求められるからです。

SUBARUの考える「うまい運転」とは、同乗者にも、周囲のドライバーにも不快感をさせない「滑らかな運転」です。

例えば、山道などで連続したカーブを走行する場合、常に先を予測して滑らかな運転をすることで、同乗者が酔いにくく快適にドライブを楽しめます。また、このように常に「急」のつく操作をしないことを心がけていると、「どの操作がクルマのどの動きにつながったのか」ということを細分化して感じられるようになります。スバルドライビングアカデミーでもこの考え方で運転スキルを高める訓練を行っています。

また、設立当初はプロドライバーを講師に招いていましたが、現在では訓練を終えたメンバーが次の年の講師になり、学んだ知識を教えています。この活動は運転スキル、評価能力を向上させるだけでなく、マネジメント力の育成にもつながっています。



開発に与える影響

テストドライブ時の評価能力を高めることによって、SUBARUの求めている“動的質感”とは何かを具体的に定義付け、何がどうなっているとそれが実現できるのかということを物理現象に落とし込み、それをメカニズムで具現化できるようになりました。

具体的には、求める動的質感を「操舵感の滑らかさ」「乗り心地の滑らかさ」「リニアリティのある挙動」「一体感のある挙動」などと定義付け、例えば「一体感のある挙動」を目指すとき、具体的に何がどのようになっていると、人はクルマとの一体感があると感じるのかを明確にしていくと、それは数値で測ることができるようになります。



トレーニングを通して、「乗って」「感じて」「考えて」「物理にする」というサイクルを短期的に回すことで、従来に比べて“動的質感”に代表される「SUBARUらしさ」を数値化できる領域が増えてきました。これにより、トライ&エラーに費やす時間が減り、より早く合理的に目標をクリアできるようになりました。またその分、人の感覚で磨き上げることに多くの時間を使い、より「乗って安心、楽しい」と感じていただけるクルマに仕上げるできるようになりました。

こうしたクルマづくりの強みが差別化戦略の支えとなり、共感してくださるお客様に付加価値を認めていただくことで、SUBARUの持続的な成長と企業価値のさらなる向上につながります。

SUBARUがお客様に提供する価値は、「安心と楽しさ」です。「乗って安心、楽しい」と感じていただけるSUBARUらしいクルマづくりを追求し、それに共感してくださるお客様との関係性をより一層強くしていくことで、持続的な成長とさらなる企業価値の向上が実現できると考えています。



SUBARUらしいクルマづくりを実現し続けるために、エンジニアの人財育成に力を入れています。開発部門のさまざまな領域から集まったメンバーが最上級の運転スキルの習得を通じて、評価能力とマネジメント力を高め、組織の壁を超えたワンチームとなって、お客様が「乗って安心、楽しい」と感じていただけるクルマづくりに取り組んでいます。

株主様限定 イベントのご案内

SUBARU技術説明会

SUBARUの「安心と楽しさ」を支える技術開発 その最新情報をお届けします

開催日時 2022年3月21日(月・祝)16:00~17:00(予定)

開催方法 オンライン説明会
パソコン・スマートフォン・タブレットからご視聴いただけます。募集人数 1,000名
応募者が多数の場合は抽選とさせていただきます。
抽選結果、視聴方法などの詳細は2月中旬ごろにEメールにてご案内します。

応募対象 2021年9月30日現在で100株以上ご所有の株主ご本人様

ご留意事項

- 開催中オンラインでご質問をお受けしますが、すべてのご質問に回答できない場合があります。
- ご使用のパソコン・スマートフォン・タブレットやインターネットの接続環境などにより、映像・音声に不具合が生じる可能性があります。
- ご視聴いただくための通信料は株主様のご負担とさせていただきます。

ご応募方法

下記ホームページからご応募ください

https://www.subaru.co.jp/ir/stock/event/tour_application.html


SUBARU 株主様イベント

検索

締切

2022年1月10日(月)24時まで

個人情報の取り扱いについて

今回ご応募いただきました株主様の個人情報は、本イベントの実施以外の目的では一切使用しません。

お問い合わせ先

株式会社SUBARU
IR部SR室
TEL 03-6447-8825
(平日9:00-17:00)

SOLTERRA

SUBARUが初めてグローバルに展開するBEV*として「SOLTERRA」を開発するにあたって目指したのは、今後SUBARUが生み出すBEVの礎として、今、BEVに求められるさまざまな期待を上回り、安心して選んでいただける実用性を持ったクルマをつくること。同時に、SUBARUのSUVとして、SUBARUに乗り慣れたお客様にも「これは紛れもなくSUBARUだ」と感じてもらえるクルマであることです。

*:Battery Electric Vehicle (電気自動車)



SUBARU公式Webサイト Solterra特設ページには、動画や車両の詳細を掲載しています。
URL <https://www.subaru.jp/solterra/solterra/>



「SOLTERRA」に込めた思い

SUBARUは、長年にわたり「人を中心としたクルマづくり」にこだわり、「安心とゆしさ」という価値を提供してきました。そして、「モノをつくる会社」にとどまらず、「笑顔をつくる会社」でありたいと考えています。

さらに、私たちが笑顔にしたいのは、今SUBARU車に乗ってくださっているお客様だけではなく、次世代、そのさらに先の世代まで、笑顔をつくり続けたい。私たちは本気でそう考えています。

そのためには、現在ますます注目されている気候変動という課題に正面から向き合い、かけがえのない地球環境を守ること、そして、地球を未来につなげていくことが必要です。

この地球に住み、その恩恵を受ける社会の一員として、SUBARUはクルマの電動化など商品のみならず工場・オフィスなどの事業活動全般を通じて、2050年カーボンニュートラルに貢献するべく、あらゆる面で対応を進めていきます。

本紙でご紹介する「SOLTERRA(ソルテラ)」も「安心とゆしさ」を提供するという思いは変わりません。また、笑顔をつくり続けるために、「人を中心としたクルマづくり」へのこだわりも変わりません。

これからも、SUBARUらしい個性あるクルマでカーボンニュートラルに貢献していきたいと考えています。



車名の由来は、ラテン語で太陽を意味する「ソル」と、地球/大地を表す「テラ」の組み合わせです。私たちが育み、私たちが暮らす、守るべきこの大切な「大地と地球」、その美しい大地に降りそそぎ続ける「太陽」の光をイメージしました。「SOLTERRA」は、SUBARUがこれから生み出していくEVの礎となるクルマです。だからこそ、「EVになっても、やっぱりSUBARUだ」とお客様に感じていただけるクルマをつくらなければならない。開発には、そのような強い決意で臨みました。

AWDの走行性能、操るゆしさ、高剛性ボディの快適な空間など、「安心とゆしさ」「SUBARUらしさ」が体現・凝縮されています。「SOLTERRA」は、初めてSUBARU車に乗るお客様にも、これまでSUBARU車を乗り続けてくださっているお客様にも、ご満足いただける仕上がりになっていると確信しています。



代表取締役社長 中村知美

「SUBARUらしさ」を表現した先進的なデザイン



エクステリア

グリルから始まる水平軸が通った力強いボディ、ボディの内側から張り出すダイナミックなフェンダーで、SUVらしい力強さとAWD性能を表現しました。

さらに、SUBARUのアイデンティティであるヘキサゴングリルとCシェイプを採用したヘッドランプを刷新しました。

ヘキサゴングリル シームレスな造形とすることで、EVらしいエネルギー効率の良さを表現。

ヘッドランプ SUBARU初となる複数プロジェクターによるロービームを採用し、先進性を表現。



インテリア

高さを抑えたインパネ造形と、ステアリングホイールの上に見えるトップマウントメーターで、前後への広がりや開放的な空間を実現しました。さらに、ロングホイールベースにより全席の足元空間を大幅に拡大し、また、大きなガラスルーフにより開放感を一層高めています。

コックピットは運転のゆしさを表現し、インターフェースは12.3インチの大画面を持つマルチメディアシステムを採用、シームレスなコンソールは操作性や収納などの機能にもこだわりました。



開発責任者(プロジェクトゼネラルマネージャー)小野大輔

SUBARUの「安心とゆしさ」



EVにおいてもSUBARUらしく、「安心とゆしさ」を提供することにこだわりました。ポイントは、SUBARUらしい「走りのゆしさ」、どんな環境でも安心を生む「AWDの制御」、トップクラスの「安全性」、そして「使い勝手の良さ」です。

走り

発進時の出足の良さや踏み増したときの力強さ、アクセル操作に対するレスポンスの良さなど、EVならではの走りが愉しめます。

さらに、EV専用のプラットフォームである「e-SUBARU GLOBAL PLATFORM」を新開発しました。

特徴は、バッテリー自体を骨格の一部に活用することで従来以上の強度・剛性を実現している点です。操縦安定性の向上に貢献し、意のままに操れる「SUBARUの走り」を愉しめます。

AWD

これまでのSUBARU車と同様、レイアウトはシメトリカル(左右対称)です。また前後のタイヤをそれぞれ別のモーターで駆動する新たなAWDシステムを採用し、前後駆動力配分の自由度を高めました。これにより、4つのタイヤのグリップ力を最大限に使えるようになり、より安心感の高い走りを実現しました。

さらに、SUBARUがSUVモデルに採用してきたAWD制御システム「X-MODE」と、新たに開発した「Grip Control」を採用し、悪路における走破性に磨きをかけました。

安全性

SUBARUが「安心とゆしさ」を提供する上で、絶対に欠かせないのが安全性です。EVは、衝突時に求められる各部の強度がガソリン車とは異なり、そのことは視界や居住性にも影響を及ぼします。EV特有の設計の難しさは、骨格形状の工夫や材料強度を最適化することでクリアしました。

また、EVは万一の事故の際、高電圧の電気部品を守ることも求められます。新開発した「e-SUBARU GLOBAL PLATFORM」に加え、衝突エネルギーを効率的に吸収できるように構造を組み合わせ、乗員はもちろん、各電気部品もしっかり守れるようにしました。

使い勝手

荷室は、SUVにふさわしいスペースの確保にこだわり、ゴルフバッグは4個、大型のスーツケースなら3個を積載できます。さらに、後席を倒せばマウンテンバイクも車内に積めるなど、ライフスタイルに合わせて必要なものをしっかり積めるようにしています。また荷室床面の高さも低く抑えることで、積載時の利便性にも配慮しました。

日常的に不安なく使える

「SOLTERRA」は大容量のバッテリーを搭載し、日常的に使用する距離を十分カバーできる航続距離を確保しています。急速充電にも対応し、短時間の充電で、長距離を移動する際の不自由さも軽減します。

さらに、電池の材料及制御の工夫により、10年後でも十分な電池容量を維持できるようにしています。

また、空調は消費電力が少ないヒートポンプ方式のエアコンを採用し、航続距離への影響を最小限にとどめました。

「SOLTERRA」は、お客様に不安なく選んでいただけるEVに仕上がっています。



株主メモ

事業年度	毎年4月1日～翌年3月31日
公告方法	電子公告 https://www.subaru.co.jp/ir/stock/announcement.html ただし、事故その他やむを得ない理由によって電子公告を行うことができない場合は、日本経済新聞に掲載しています。
株主名簿管理人 特別口座管理機関	〒100-8241 東京都千代田区丸の内一丁目3番3号 みずほ信託銀行株式会社
郵便物送付先	〒168-8507 東京都杉並区和泉二丁目8番4号 みずほ信託銀行株式会社 証券代行部
お問い合わせ先	0120-288-324 (平日9:00～17:00)

共同開発

「SOLTERRA」は、トヨタ自動車株式会社(以下、トヨタ)との共同開発でつくり上げました。

このプロジェクトは、両社が対等な立場で取り組みました。電動車に関する開発設備や生産体制を考慮して、SUBARUの開発者がトヨタのEV部門に出向し、両社にとって本当にいいクルマをつくる過程で「SUBARUらしさ」を表現することに注力しました。

「仲良くケンカしよう」というスローガンのもと、トヨタのメンバーとお互いに妥協することなく議論を重ねた結果、本音で意見を交わす関係性になったことで、SUBARUが目指すクルマづくりを余すことなく実現しました。

